HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	再刊にあたって
Author(s)	所, 伸一
Citation	教育史・比較教育論考, 19, 93-93
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39491
Type	other
File Information	019-007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

再刊にあたって

所　伸一

『教育史・比較教育論考』第19号をここに発行するにあたって一言書きとどめたい。

本誌はかつて、学会誌や学部の研究紀要ではカバーしきれない、研究室を構成する教員のみならず大学院生・学生ら若いメンバーの学問形成途上の諸活動をも紹介する場として、1962年に創刊された。これは70年代前半まで続いた。そして数年の休刊をはさんで、1980年、竹田正直・逸見勝亮・所伸一の3教員からなるグループが形成された頃に再刊された。この時に付け加わった新たな主旨は、学部の卒業論文の中ですぐれたものを公開すること、研究室と外とをつなぐことの2点であった。そして実際に卒論も掲載し、また、日本および外国教育史においても比較教育においても研究室メンバーの交流している国内外の研究者からの寄稿を受けて、時々の新鮮な学問的息吹をより反映させようとしたのだった。しかし96年をもって途切れてしまっていた。

今次の再刊の内在的なきっかけに触れるならば、一つは卒業論文で、公刊すべきかと思われる達成のものが現れたこと。もう一つは、世界の後進国・地域や民族マイノリティに関する教育の研究は研究室創設時よりの特色であったが、わが研究室に大学院生として入学しアイヌ教育史研究を進め、そしてその後に影響を与えた竹ヶ原幸朗氏が昨春急逝され、関係者たちにより追悼の研究会がもたれたことである。その時の報告梗概や研究史を語る資料が残されたが、これは再刊本誌で公開するのがもっともふさわしいと現研究室メンバーが一致したのであった。

もし外からのきっかけと言うことが許されるなら、次の様なことになろう。

つい先頃までの我が政界の「教育改革」論議はその後やや下火になったようだが、子供・青年の成長・発達をめぐる問題・課題は依然として残されているばかりか、拙速の「改革」の結果と相まって困難・複雑さはむしろ増しているようにも思われる。ここにおいて教育現象を歴史と比較の方法で反省的に考察することを担う我が研究室の領域が重要であることは繰り返すまでもない。だがこの間大人社会の作ってきた青年の学校囲い込みの故でもあろうか、若者の新聞離れ、政治離れは歴史的知識と関心の形成にも影響しているように思われる。かくして、『教育史・比較教育論考』というわが研究室独自の「発信」の伝統を、新しい媒体も借りて復活させることに踏み切ったのである。

この再刊号では、久しい休刊をはさんでの発行ゆえ、研究室の活動の歩みを振り返ると共にそれを社会と共有する意味を込めて、創刊以来の全号目次、ならびに90年代中期以降の卒業論文・修士論文の題目ならびに研究室メンバーが関与した博士論文関係文書を一覧資料として掲載する。

本誌の体裁は今後も模索し続けるであろう。しかし、内容に関わっては公共性の視点を忘れずに臨みたい。媒体の電子化も一つの狙いとしたとは言え、それのみによって紙の浪費「公害」を減じることに寄与となるものではなく、研究室の発行物として斯界の前進にいささかでも貢献できなければ「浪費」であろう。19世紀の半ば西欧の学校制度・教育学の紹介が山をなして出版されるロシア社会に警句を発したウシンスキーの姿勢を筆者は思い起こしている。本誌の在り方に江湖のご批判を期待するものである。